

第11期東京都生涯学習審議会

第9回全体会

会議録

令和2年12月17日（木）

午後6時00分から午後8時04分まで

オンライン会議

○出席委員

笹井 宏益 会長

酒井 朗 副会長

青山 鉄兵 委員

土屋 佳子 委員

永島 宏子 委員

野口 晃菜 委員

林 幸克 委員

広石 拓司 委員

山崎 順子 委員

第11期東京都生涯学習審議会 第9回全体会 会議次第

1 開会

2 議事

(1) 事例紹介

「NPO等による青少年を対象とした取組に学ぶ②」

一般社団法人ウィルドア共同代表理事 竹田和広さん

(2) 審議

3 今後の予定

4 閉会

【配付資料】

資料 竹田和広さん発表資料「一人ひとりが自分と社会と共に生きられる未来へ」

第11期東京都生涯学習審議会第9回全体会

令和2年12月17日（木）

開会：午後6時00分

【主任社会教育主事】 それでは、定刻になりましたので、ただいまから第11期東京都生涯学習審議会第9回全体会を開催させていただきます。

本日は、松山委員が御欠席のほか、全員の委員が参加予定となっております。

なお、本日は生涯学習課長の倉富が他の公務対応のため、代わりに主任社会教育主事梶野が司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、本日の資料を確認させていただきます。事務局から事前に次第と発表資料をお送りしておりますが、各委員の皆様におかれましてはお手元に御用意いただいておりますでしょうか。

次に、傍聴者についての確認をいたします。本日1名傍聴希望者がお待ちですので、入室していただくことでよろしいでしょうか。

（異議なし）

【主任社会教育主事】 では、会場に御案内ください。

それでは、ここから笹井会長に議事進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【笹井会長】 それでは、次第に沿って進めていきたいと思います。本日は、NPO法人等による青少年を対象とした取組に学ぶというテーマで、前日もゲストの方をお招きしましたけれども、今回は一般社団法人ウィルドアという団体の共同代表理事をさせていただきます竹田さんをお招きしております。よろしくお願いいたします。

【竹田代表理事】 よろしく申し上げます。改めまして、一般社団法人ウィルドア共同代表理事の竹田と申します。このたびは貴重な機会を頂きまして、ありがとうございます。40分程度お時間を頂けるということで、私の6年にわたるいろいろな活動の御紹介を今日はさせていただければと思っております。

では、画面の共有をさせていただきます。

まず、簡単に私の自己紹介をさせていただきたいと思います。名前は竹田和広と申します。東京出身、生まれは東京で、基本的には神奈川県で育っています。1992年生まれで今27歳、起業して6年目になります。この後、私の活動について御紹介したいのですが、かなり密接に自分自身の原体験と申しますか、高校生からの自分の人生に関わってきますので、そちらを少しでも詳しくお話ししたいと思います。

私の自己紹介を文章で簡単に書かせていただきましたが、口頭でも御説明を差し上げたいと思います。先ほども申し上げましたが、私は神奈川県で普通に、いわゆる公立高等学校で育ちました。どんな高校生だったかといいますと、どちらかというとスポーツは好きではない。運動はできない。水泳をすれば溺れていると言われてしまうような子であり、コミュニケーション力が高いかと言われるれば決してそうではなく、どちらかというと当時の悩みは、昼御飯で友達がいなくて、いかに、ぼっちの昼御飯を乗り過ごすかということをもいつも考えているような高校生でした。

そういった高校生で、部活も入らなかったのですが、高校1年生のときに、生徒会は少し興味があったので関わらせていただいた中で、学校の先生に「おまえ、暇ならこのイベント行ってくれば」と紹介された。それが私にとってのターニングポイントでした。どんなイベントかといいますと、かながわハイスクール議会という神奈川県の高等学校がたくさん、生徒会が中心で集まってきて、神奈川県未来について考える、そんなイベントでした。そこに私は半強制的に先生に連れていかれたのですが、そこですごく衝撃的な出会いがたくさんありました。繰り返しですが、このイベントに参加する前は、なぜそこまで私が生きづらかったかといいますか、学校の中で居場所がなかったかという、少し政治やボランティアなどに興味があったのですが、進学校という特徴もあって、大学受験の勉強で頭の良い人がちやほやされたり、スポーツができるイケメンがちやほやされる中で、私は、どちらかというとスポーツもできなければ、勉強も1番でなく、真ん中ぐらい。そこで自分の居場所がないなと思っていたのですが、この場に来て人よりも政治に詳しくあったり、実は地域のことをよく知っていたり、自分が「すごいね」と言われたり、周りから求められる経験をしました。

また、出会った人も、いわゆる学歴が低い。当時の思考からすれば、学歴が低いやつは人生負け組でお先真っ暗なんじゃないかと。そこまで言うと失礼かもしれませんが、家庭の育て方も、東大に行くと勝ち組だという感じでした。そういう価値観で来たのですが、

この場に出会って、地域について語っている大人って格好良いな、大学へ行っていない大人もすごく格好良いんだな、そんなことに気付きました。その中で、自分の中の価値観、軸というのでしょうか、大学に行く、勉強ができる、頭が良いでなく、話がうまい、地域のことを考えている、そういった人のほうが格好良いなと私は思うようになりました。その中で「起業」という言葉に出会ったり、この後続く「地域」というものに出会いました。

そういった中で、高等学校時代、自分はそう変わったのですけれども、周りの仲間たちを見てみると、同じように進学校で、なかなか自分の夢などを語れなかったり、そこにもやもやしている子もたくさんいましたし、夢を持っていないということで悩んでいる子たちもたくさんいました。高校生ときから私自身、どうしたらもっと夢を持てるのだろうか、どうしたらもっとこの中で夢を語れるのだろうかなどとすごく問題意識を持ちまして、高等学校時代から実はそういう高校生同士の交流会などを企画したりしていました。

そんな経験もありますし、更に、起業に至ったのは、その後の東日本大震災がやはり大きなきっかけになっています。価値観が大きく変わったのもありますし、世の中の価値観が変わったというのがあります。私自身も、被災地の活動であったり、そこから地方創生というものが流行する中で、私も例に違わず、いろいろな地域を回らせていただく中で、夢がないとか悩んでいた当時の仲間たちが、地域と関わる中で、ボランティアなどをする中でどんどん生き生きとし始めたのですね。僕はここに移住してこの人たちに何かしたい。私は将来福祉を学んでこういう人たちを救いたいんだ。そういう地域にあるいろいろな課題だったり、そこのリアルな出会いが人をすごく生き生きさせて夢を見つけていく。そんなことにすごく私は気付かされました。そういった気付きから、横須賀でたまたまイベント企画ができる機会がありまして、そこから実際これを仕事にしようと思い、起業した。そんな経緯になります。

その中で私が創業したのが一般社団法人ウィルドアになります。どのようなビジョンを掲げたかといいますと、「“自分”と“社会”と共に生きられる未来」と銘打ちまして、私が高校生時代に感じたような、自分がこう在りたい、こうなりたい、そんなこととしっかり自分が向き合っている。そして、独りよがりではなくて、社会の中でその理想の自分にあった役割を見つけていく。これから複雑でいろいろと安定しない世の中、不確定な世の中だというときに、人が豊かに暮らせるには、正に自分と社会と共に生きる、そこが大事なんじゃないか。そのために何ができるかということを考えたいと私は思いました。

その上で、ミッションとしましては、「そうになれるはずなのに出来ない 一人ひとりが在

りたい姿に近づくために、適切なきっかけをデザインする」ということを掲げています。このあたりは詳しく後ほど御説明したいと思いますので、割愛させていただきます。

団体としましては今6年目で、正会員としては9名、従業員1名で、基本的には3人が常勤で働いている。そこにボランティアやインターンなど延べ20人ぐらいが常時動いている団体になっております。

何をしているのかと簡単に申し上げますと、大きな三つの柱があります。一つは、NPOとの協働によって新しい枠組みをつくっていきこう。二つ目は、企業へ協力してプログラム開発であったりコーディネートをしていきこう。三つ目は、学校や地域というものに対してモデルをつくっていきこう。詳しくはこちらも後ほど御説明したいと思います。

そういった私の問題意識の中でどういうことを考えながら事業をつくっていったのかという話を少しだけさせていただきたいと思います。一番根っこにあることは、ここのページ（8ページ）になります。「学びの主演は高校生」ということで、私の経験からでもあるのですが、やはり学校の中だけ、社会だけという、その分断が当時の私にはすごく苦しさにつながっていたと思っています。それは大人から、学校ではこうあるべきというものが与えられ、社会ではこうあるべきだと与えられる。そこが分断していたことがすごく私は引っかかっています。主演たる高校生、一人ひとりの高校生が自分が在りたい姿に向かっていく。そのための自分で学びをつくっていく。それを「わたしから始まる学び」と名付けまして、その「わたしから始まる学び」を後押ししていきたい。そして、下のほうに書かせていただいているのですが、自分がこう在りたい、在りたい姿に近づきたいという思いは、みんなが持っている何か——貧困だから、LGBTだから。もちろんその人たちだからこそ持っている課題もありますけれども、その人たちだけに届けるのではなく、全ての人がそこにアプローチできるようにというところを一つ思いとしては持っています。

「そうになれるはずなのに成れない」ということに関しては、正に私自身、誰にも見えてもらえなかったという感覚があります。私自身、いわゆる問題児ではなかったですし、勉強も普通にできましたし、貧困でもなかった。でも、すごく悩んでいた。そういう子たちにも届けたいという思いがここにあります。

その上で、どうすれば在りたい姿に向かっていけるのだろう、どうすれば僕の理想に近づいていくのだろうと考えたときに、ここ（9ページ）に書かせていただいたサイクルが大事なのではないかと考えました。このあたりは簡単に御説明させていただきます。

まず、一番上に書いている「自分／社会に対する新しい気づき・興味・問題意識の獲

得」とはどういうことかといいますと、実践プログラム例のところでは私たちが実際にやっている例を書いたのですが、簡単に言ってしまえば、意識下にあったり、元々持っていたものを引き出して、自分はこういうのに興味があるんだ、こういうことをやりたいんだと自覚する。もしくは、新しく人の話を聞いて興味を獲得する。そこがスタート地点になったときに、そこから例えば、私は地域に興味を持った。いろいろな人の話を聞いてもっとコミュニケーション力を高めたいと思った。そういう自分の中の気付きがあった先に固有の体験・経験をするのをサポートする。実際にそれは誰かにインタビューをしに行くという話かもしれません。後ほど詳しく話しますが、ワンダリングチャレンジというプログラムに参加して、そこで新たな経験を得る。

ただ、経験だけではやはり学びにならないと私たちは思っています。その学びを基に、あなたはどう思ったのか。その経験からあなたは今後どうしたいと思ったのか。自分に焦点を当てたりフレクシオン。それがその次に加わることによって、最初に戻りますけれども、自分はやはりこうしたいんだ、これに興味があるんだ、そこにまたつながっていく。

ここがぐるぐる回っていく中で、「キャリア発達」という言葉にしていますけれども、自分がどう在りたいのか。そのためにどうしていきたいのか。そこがより見えるようになっていく。そして、そこに向かっていく。皆一人ひとりが回っている社会にしていきたいというふうに私たちは考えています。

こうしたときに二つ大きな問題があると捉えています。一つは、最初に御説明したところですけれども、自分がどう在りたいのか、どういう問題意識を持っているのか、そういうところについて考える機会がそもそも少なかった。また、そこに例えば気付きがあった。実は私は政治に興味があるんだというものがあつたとしても、そこから何か一歩アクションができたり、自分で調べてみるかというところ、そこができていない。そのサポートがない。この二つが大きな課題だと捉えまして、この後御説明するいろいろな事業を設計してきました。

加えて、その事業を更に何をするのかとつくっていくときに、いわゆる学校教育だけでなく、社会教育だけでなく、この二つの弱み・強みをうまく生かし合う仕組みづくりだったり、仕掛けをつくっていきたくて当初から考え、活動しております。それぞれどういう強みがある、弱みがあると認識しているか御説明しますと、まず学校教育については、やはり能動的には機会を求めない。自分が何が欲しいかまだ分かっていない。そんな高校生でもある種、半強制的に働きかけることができる。また、年間を通じて、もしくは3年、

中・高だと6年間ずっと見てプログラムを届けられるわけですから、系統立てた場であったり機会を届けることができる。これはやはり学校というのはすばらしい場所だなと思っています。

逆に、弱みとしましては人間関係が固定化していく。それは良い意味でももちろんあるのですが、ずっと同じメンバーでやっていくわけですから、なかなか異なる価値観に触れる機会がなかったり、そのために求められる自分が学校の中で画一化されてしまって、変わりたいと思ったときになかなか変われなかったり、自分は実はこれに興味があるんだということが表現しにくかったりするということを感じます。また、集団全体ということで、学校全体でカリキュラムがつくられますし、クラスでも40人だったり少なくとも20人単位での授業になりますので、どうしても個別の期待であったりニーズに寄り添い切れないようになる。

一方で、ここは逆に強みとして社会教育はすごく優れていると思っています。個性や価値観の表現。ある種の非日常、単発なことも多いです。だからこそ新しい自分をそこで発揮できたり。あとは、必ずしも20人に届けなければいけない、100人に届けなければいけないのではなく、1人に届ける場も社会教育では用意できるというところで個に寄り添った機会をつくりやすいというのはあります。

また、弱みとしては、高校生にリーチできない。これはいろいろな方がきっとお話しされるのではないかと思うのですが、良いコンテンツがあってもなかなか届けられなければ、意味がないと言うと強過ぎますけれども、価値が発揮されない。また、社会教育として継続的に届ける場のコストがかけにくい。大きな団体が少なかったりするところで単発な場や機会になりやすく、継続的に関わるから出せる価値が出しにくいというのがあるのではないかと考えております。

ここの強み・弱みを掛け合わせて、どうすれば一人の高校生が自分の在りたい姿に向かっているのか。そういう環境がつけられるのかということを考えてきました。

ここからは少し具体的な話に行かせていただきたいと思います。学校内外の主な取組だけ御説明させていただきます。詳しくは書かれている文章を読んでいただきまして、口頭では簡単に説明させていただきます。

まず、学校内で最初に私たちが始めたことは、高校の中で、当時はキャリア教育という名前が多いですけれども、キャリア教育の授業サポートという形で始めさせていただきました。高校生の社会的・職業的自立支援教育プログラム事業に私たちとしても関わらせて

いただきまして、その中でいろいろな都立高等学校に届けてきましたし、あとは神奈川県で御縁があった三浦学苑高等学校で2015年からずっとプログラムを届けさせていただいています。企業のプログラムの開発でも、いろいろな企業さんが持っている資源を学校現場にどう届けるのかというところで、JTBさんやサイボウズさんと一緒にプログラムを開発・運営させていただいております。また、個別の高校生へのプロジェクト活動サポート。少し学校内らしくない取組ではあるのですが、学校の探究のカリキュラムの中でも、個別にこんなことをしてみたい、地域でこんな人に会いたい、そんな子たちの悩みを聞いて、こういう人に会いに行ってくればということをサポートできる場を学校のカリキュラム内として行わせていただくとともに、細々ではあるのですが、やっております。

最後に、そもそも学校のそういう環境をつくっていくのは教員の皆様でありますので、そういった皆様が学校の中で、「内発的動機から生まれる問い×実社会での実践を通じた学び」と表記していますが、探究カリキュラムをつくっていく上でサポートできることがあればということで、研修であったり勉強会の企画などをカタリバと一緒にさせていただいております。

また、学校の外の話になりますが、最初に学校内外両方とも私たちは活動を始めています。学校外で最初にやったこととしましては、横須賀の地域の企業と一緒にワークショップを開く。具体的には、横須賀には無人島の猿島というのがあるのですが、そこで新聞形式で猿島の魅力を表現するというワークショップを実施させていただきました。もっと地域に出てみたかった、新聞をつくってみたかった、そういう高校生に対するプログラムをつくったのがスタートだったのですが、その後いろいろな御縁があり学校の中に入っていく中で、やはり学校の中だけでは届けられないですし、学校の外だけでは限られた子にしか届けられない。そこに問題意識を持ち、2017年以降は学校外のほうの環境づくりに力を入れるようになりました。

詳しくはまた後ほどですが、カタリバさんがつくられたマイプロジェクトアワードという枠組みの中で一緒に協力させていただき、企画をやらせていただきました。あとは、横須賀市とも連携させていただきまして、起業してみたい、学校の中で社長をしてみたい、そんな子に向けてアントレチャレンジという起業体験をするイベントです。あとは、NPO法人ETICという、アントレプレナーを日本中で育てられているNPOさんと協働しまして、飛び抜けたという表現をしているのですが、次世代の起業家・イノベーターになりたい高校生に向けた合宿及び奨学金制度を運用したり。そういった中で、いろいろ高校

生支援をしてきたのですが、やはり外に出る高校生が少ない。その最初の一步をどうつくればいいのかという中でワンダリングチャレンジ神奈川大会。これも後ほど詳しく御説明しますが、目的意識を育むためのノウハウとして台湾のNGO等が取り組んでいるプログラムがありまして、そこを頂き、ETICと一緒に日本の中でどう広めるかということにも挑戦しています。

いろいろなことをやっていると思われると思うのですが、まとめますと、ベースにあるのは最初に説明したサイクルです。このサイクルをぐるぐる一人の高校生が回していけるような環境をつくる。そのサイクルというのは1回回ればいいわけではなく、ぐるぐる回る中で、これはグレー軸で示していますが、どんどん明確にキャリア発達していく。それに応じた仕掛けがやはり必要だと思っていますので、こうした多岐にわたる活動をしているというのがあります。最初で言えば、何をしたいか分からないところから始まり、その頃には学校の中でやるが多かった。中段で、自身の興味・理想が何となくあるなというときにはマイプロジェクト、探究的な学びをサポートする中で、学校の外でそういうことを深められる場をつくった。最終的に、明確に私はこれをやるんだというのが見えてきたところでは、もう学校の外が中心ですね。こういうことをしたいという子供たちと一緒にサポートする仕組みをつくる。そういった思考の下、いろいろな環境づくりをやってきました。

ここまでの全体概要になりまして、あとは少し詳細に御説明したいと思っております。

まず、学校内での取組で、学校の中でやっているプログラムについて少しだけ御紹介したいと思います。私たちは、昨年であればプログラムを10校ぐらい届けているのですが、こだわりとしてはオーダーメイドのプログラムを届けることに注力しています。というのは、その場だけで何か価値を与えたいのではなく、その場が、そこをきっかけに彼ら一人一人が「わたしから始まる学び」、自分はこう在りたい、ここに向かう学びを後押ししたい、そういった思いで行っております。その学校の偏差値などわかりやすい指標だけでなく、例えばどんなものが好きな人が多いのか、どんなカリキュラムが行われているかを確認した上で取り組みやすい文脈の中で学べるプログラムをつくったり。学校の先生とお話ししながら、カリキュラムの中で、このタイミングではこういう一步を踏み出せるといいですねというところを話し合いながらつくることを行っています。

行っているプログラムの一部を紹介させてください。マンガから始まるキャリア教育というのは、マンガだけでなく、自分が好きなアニメやドラマのキャラクターを書き出し

てもらって、何で自分は好きだと思うのか、なりたいのか・なりたくないのか、懂れているのか・懂れていないのか。なぜそう語るのか。そうすると、キャラクターへの愛を語っているつもりが、実は自分はこういうところに懂れて、こうなりたいと思っているんだと気付くような機会にさせていただく。能力獲得カードゲームというのも、能力を書いてあるカードをたくさん用意します。早く社長になるために、ゲーム的にそのために必要な能力を選んで説明しようというところから始まるのですが、最終的には自分が在りたい姿になるためにはどんな能力が必要なのかということを、たくさんあるカードから選んでもらって説明をする。そんなカードゲームをやりながら、やっている本人としては、自分のことを考えているつもりではなく、ゲームのつもりでやりながらも自分のことに気付いていく。そんなことを都立足立東高等学校でやりました。オリエンテーションワークも、都立日野台高等学校では4月入学早々に私たちに時間を頂きまして、どういう理想の高校生活を送りたいのか。先輩の話を知りたいから、そのために何ができるか。そんなことを考えるワークをやらせていただいたり、本当にタイミングに応じて別々のプログラムをさせていただいています。

また、単発でやる中で限界を感じたと先ほどもお話ししましたが、定期的にできる学校ないかというところで、横須賀の三浦学苑高等学校と都立の一部の高等学校では、年間1回でなく、3～4回時間を頂きまして継続して関わることをさせていただいています。こちらも目的としては同じです。関係性をつくる中で、例えば同一のスタッフが関わる中でどんどん信頼が大きく浮かび上がっていく。その信頼があるからこそ、本当はこうしたいんだよね、こうやりたいんだとか、その言葉から情報をお渡ししたり、こういうことをやってみたらと提案することが可能になります。何よりも教員の皆さんとのコミュニケーションが取れることで私たちへの信頼も高まりますし、その信頼感で、プログラムをやっても興味がある人たちがいらっしゃいましたら、こういうことをやります。うまく学校の中に入ってニーズをつかみ、そのニーズから、この学校にはこういうことに参加したい子がいるのではないかという情報をお渡ししてくる。そういった学校内外の行き来をつくっていくことも挑戦させていただいています。

続いて、学校の外の取組事例になります。強み・弱みの話に戻りますけれども、学校の外に、自ら、もしくは先生に後押しされて出てくる子たちの異なるニーズであり、自分の思う学びというものを届けられるかというのが大事だと思っていましたので、ウィルドアという名前の由来にもなるのですが、ドアというのは選択肢だと思っています。いろいろ

な機会のことをドアと称しています。ウィルは意志です。つまり、世の中にはいろいろな扉があって、いろいろな機会があって、それを自分の意志を持って開いていく。それを繰り返す中で自分の理想に近づいていく。そんな未来をつくりたいと思ってウィルドアという名前にしました。そのときドアに求められるのは、いろいろな色であったり、いろいろな個性を持った扉が必要だと思っていて、それは私たちがつくるものではなく、もう既にあるものだ。もしくは、なかったとしても、私たち以外の誰かがたくさん仕掛けをつくっていく必要があると思っていました。ですので、私たちとしてはいろいろな団体の強さを生かしながら、必要な学校とつなぐこともありますし、高校生とつなぐ。もしくは、一緒にプログラムをつくってしまう。そんなことを繰り返しながら活動をしてきました。なので、協働実績としてもNPOもあれば企業もあり、学生団体のようなものもあります。いろいろなところと連携しながら、私たちのサポートでうまく高校生に届けようということ挑戦してきました。

いろいろ挑戦する中で、やはり一步目を踏み出せない。まず仕組みがそもそもないと、どんなにプログラムをたくさんつくっても使われないと思うようになりまして、いかに学校の中と外をつなぐかという視点で学校の外につくったものの御紹介をしたいと思います。

一つ目はワンダリングチャレンジという取組です。ここまで何度も名前を出させていただきましたが、昨年からは私たちが日本で取り組み始めたプログラムです。どういう取組かといいますと、3人1組で期間中ミッションに取り組む。ミッションというのは、表に書いてある15個ぐらいいと与えられまして、2週間のうちに何個挑戦できるかを競う大会になっています。ミッションというのは、左下書いているところを見ていただければと思うのですが、例えば、3大陸から来ている人を街で見つけ出してインタビューしてみよう。どんなインタビューをするかという、その地域の社会課題は何ですか。自分は、日本はこうだと思っているのですけれども、どう思いますか。そんなことを聞いてみようというミッションになっています。この写真のように、彼らは実際に街に飛び出して、外国人に英語で話しかけることもあれば、頑張って日本語がしゃべれそうな外国人を自分の好きな時間で探してくるわけです。その結果を左下書いているリフレクション・クエスチョン、その問いに答えた学びの振り返りを提出してもらおう。そこの学びの質でポートフォリオ評価があるので、こちらで評価する。その点数等で受賞者を決める取組です。

ポイントとしては、いかに楽しそうと学校から一步飛び出すところをつくれるかが全てと思ってこのプログラムを私たちはつくっています。つまり、ミッションのつくり方とし

てもそうですけれども、楽しそう、ちょっとやってみたいと思うミッションの用意であったり、賞品は、1位になると台湾に行ける、または5万円のプレゼント。ある種、そういう餌を使っています。そこで、彼らの参加動機としては「焼き肉食べたい」でいいんです。「焼き肉食べたい」で実際3人1組で参加してきます。ですけれども、終わった頃には、ミッションを見ていただくと、本当に自分のことを振り返るミッションをつくっているのですが、やっていく中で、あれ、自分はこんなことができるんだ、社会はこうなっているのだと気付いていく。実際、去年も、最初は、台湾へ行きたい、焼き肉食べたいですと参加した。終わってみると、自分はこんなことができるんだと思いましたとか、中には、コロナ期間中も全国でやったのですけれども、署名活動を自分から始める高校生もいました。それまで何もやっていなかったのですけれども、コロナのことを調べるミッションがあって、このままではやばいと思ったのか、そのときはコロナで学校の休校を延長しようという署名運動ですけれども、こうやって活動する子もいました。

そういう入り口と出口をうまく変えて、いかに学校から出させるか。そのためにつくったプログラムになります。今一番力を入れているものになります。

あと、マイプロジェクトは、恐らく知っている方も多いかと思いますので、簡単にいきます。そうやって飛び出した形だったり、学校の探究的な授業で何かやってみたいと思った。でも、学校の中だと、探究のやる気のある・なしがあったり、実はすごい思いがあるのにできなかつたりする環境もあると思っています。なので、学校外で、やる気のある子たちが中間発表、お互いに発表し合える場であったり、その最初をサポートする。そのイベントを学校外でつくったりしてきました。また、知見・情報の共有というのも、そういうのを支える地域団体であったり、学校も加わりますが、学校の先生と情報を共有する。そういった中で、何かやりたいと思った子が一歩進むサポートする取組を、カタリバさんであったり全国のNPOさんと一緒にやらせていただいています。

三つ目として、MAKERS UNIVERSITY U18をETICというNPOと一緒にさせていただいています。こちらは、いわゆる学校の中から、探究にかかわらずいろいろな活動をしてしまっていて浮いている子、はみ出している高校生に対して届けているプログラム、コミュニティです。例えば発達障害と呼ばれてしまっているカテゴリーがあると思うのですが、多動で何かいろいろなことをしないと落ち着かない。でも、何か苦手があっても、実は起業などにすごく向いているケースがあると思うのですね。学校の中では、あいつ馬鹿だなどと言われていても、実はすごく強いものを持っていたり、地域で活

動している高校生もいる。そんな子たちが直面するのは、学校や地域だけだと、おまえは高校生だからこれぐらいにしておけば、受験で一旦ここまででいいんじゃない。もっともっと先に行きたいのに、そこを応援されない。本当に限られた層ではありますが、そういうニーズを抱えた高校生が世の中にいると思っています。そういった高校生たちが、自分はこの道を進んでいいんだ。別に大学へ行かないことを推奨しているわけではありませんが、大学に行かずに起業してしまう。自分の道を切り拓いていくことを肯定してくれるメンターであったり、それを肯定できる仲間との出会いを全国30人に届けようということを毎年やらせていただいています。

これを実現するためにすごく力になっていただいているのが右に書いてある奨学金を出していただいている起業家やイノベーターの皆様で、いろいろな起業家やイノベーターの皆様がそういった高校生を応援したいということから、寄附の形でお金を頂き、そして奨学金を出していただき、そのお金でこのプログラムを運営している形になっています。

この奨学金も特色がありまして、いわゆる大学に行くためのお金、留学に行くためのお金ではなく、彼らがあふれる思いでこれをやってみたいんだという、そのプロジェクトに対する奨学金、活動の奨励金みたいな形になっています。実際このお金を使って登記する高校生もいれば、家庭の事情でパソコンも買えなかった子もパソコンをそれを買ってアプリをつくり始める。そういった思いから一歩踏み出すための最高の場、応援の仕組みを行わせていただいています。

学校内外それぞれのお話をしましたが、今私たちとしても一番注力したいのは、ここをどうつなぐかというところでした。その取組で一つだけ御紹介したいのがマイプロジェクト関東事務局として長野県教育委員会と一緒にやらせていただいている取組です、マイプロジェクトをベースにした長野県の高校生の探究的な学びのサポートの仕組みづくりです。具体的に何をやっているのかと申しますと、社会教育側、学校外で私たちがやっているのは、スタートアップ、中間発表というイベントを開く。そして、発表会、アワードという名前で呼んでいるのですけれども、その場をつくることを長野県教育委員会さんと一緒にやらせていただいています。

私たちは、これは何が面白いと思っているかといいますと、長野県教育委員会と一緒にやっているからこそ、学校への信頼がとても強く、学校から安心して送り出せる環境をまずつくっていること。学校の探究的な学びカリキュラムに沿って、4月、5月はみんなテーマ設定をする時期ですので、その時期に当ててテーマ設定をサポートするような場をつ

くる。7月、8月、9月、夏や秋に関しては中間報告で、彼らが行き組んできたテーマについて周りに語ってみて、次はどうしようかと考える場をつくる。最終的に12月のタイミングで発表する。そのことによって、やって終わりになる学校がもしかしてあったとしても、やる気がある子に対しては学校の外へ出て、自分をもっとこうしたいんだと思いを語り、学校の授業を終えてもアクションし続ける、学び続ける後押しをする場をつくったりしています。ここが教育委員会の力によってかなりスムーズに、学校の先生からも送り出しやすい結果、ほかのマイプロジェクトの取組を含めてですけれども、普通だったら多分来ないような生徒、ある種まだ探究に本気になっていない生徒であったり、実はやりたいんだけどなかなか自分では踏み出せないような生徒も、先生から後押しされてくる。そのことによって、より広い層にアプローチできていると思います。彼らが帰った学校で、その姿を見て周りに与える。その行ったり来たりをうまくつくれていると思っています。こういった取組のように学校教育と社会教育をうまく結び付けることができないかということを実験してまいります。

5年間やっていく中で、一つだけ、成功事例と言うと違うのかもしれませんが。私としてすごく良かったなと思っている事例を紹介させていただきたいと思います。この文章は、この写真に写っている彼女ですけれども、SNSでの投稿を抜粋して書いたものになります。読むと長いので、もし御興味あれば読んでいただきたいのですが、簡単に言いますと、彼女は、いわゆる自分に自信がない、どちらかというとなら不登校になりがちな子だったので。次のページで御紹介するのですけれども、学校内外の私たちがつくった仕組みによって自信をつけていって、それがすごく今に生きている。そのことをすごく言ってくれたなと思った文章になっています。

具体的にどんな学校内外の連鎖、サイクルが結び付いていったのか御説明しますと、最初に彼女と出会ったのは高校1年生のときの土曜日の授業でした。いわゆる学校の中で私たちがプログラムを届けていく中で、彼女としてはあまり乗り気でなかった。何かまたいつものことがあるのかぐらいの気持ちで入ったと聞いているのですが、その中で、大人と話すのが楽しいな、大学生と話すのが楽しいな、そんな気持ちになったのだそうです。そのときに私たちとしても外部の猿島でのイベントがあったので、そのチラシを渡したんです。そうしたら、試しに行ってみようかなというので来てくれました。そのワーク自体ももちろん楽しかったと思います。そのときに私たちとしても先生から、彼女は実は不登校ぎみだったり課題を抱えているという話を聞いたのですが、すごく楽しそうに話してくれて、

かつ、発想力が豊かだったんですね。それをすごく指摘してあげたら、すごく喜んでくれて、かつ、実はこんなアイデアがあるんですと教えてくれたのです。そのアイデアを今度は学校でやってみようよと終わった後の打ち上げ的なところでなって、それを学校へ持っていったら、先生方もすごく積極的にそういうのを応援してくれる学校でしたので、やってみることができた。それが3番目の写真になっているのですが、生徒主体でチームをつくって、学校の授業をつくってしまう。そんなことを始めました。

そこで彼女としては企画をつくる楽しさに気付いて、自分でもできることがあるんだとなり、更に私、もっとやってみたいんですと相談してくれました。そうしたら、今度はクラスに関係なく、学校の4人のチームをつくってきて、学校外で社会人や大人と話す機会をつくりたいんだと。その相談を受けて、私たちもいろいろ場の提供であったり、こうやってみればと。マイプロジェクトのサポートと呼んでいるのですけれども、やってみると、どんどん進めていってくれて、写真にあるように20人ぐらいの人が集まるようなイベントを全部彼らが企画して運営してくれました。

結果だけ見れば、彼女はすごく才能があって、やる気の高い子だなと思うのですけれども、スタート地点から比べると、よくもこんなに成長したなと先生方も驚いてくださるようなケースでした。これができるのは、学校へ最初に私どもが入らなければ絶対に彼女は参加してこなかったと思います。逆に、学校外だけで場をつくっていても、学校の中だけでつくっていても、彼女とは2回会えただけで終わっていただろうと。ここをうまく行き来できたことで彼女の大きな変化を生み出すことができた、いつも思い浮かべながら活動をしています。こういった活動で私としてもこういう事例を増やしていきたいですし、こういう場を届けていきたいと思っています。

最後は、活動してきた中での課題であったり、その上でどういったものが今必要だと思っているのかお話ししたいと思います。もちろんいろいろな課題があるのですけれども、今一番強く感じているのは、学校と地域資源と書きましたが、社会教育だったり、接続する仕掛けが不十分であって、一人一人の高校生の選択肢とうまく社会教育資源、学校外の資源を生かして自分の学びを続けるところまでのサポートができていないと感じています。どういうときにそれを感じるのかといいますと、これは三つ例を示させていただきました。

一つ目は、学校の中での瞬間です。それは教員の方針、社会資源とのつながりや理解によって生徒の可能性に大きな差が生まれている。例えば、探究の時間、探究的な学びというのは、本当に私としては追い風の仕組みになったと思っているのですけれども、そこを

やっていく中で、学校によっては、総合的な学習の時間のときと同じですけれども、ほかの進路行事、例えば受験に対する進路講演であったり、文化祭、体育祭、修学旅行、そういったものとの兼ね合いでどんどん削られていくことがあります。その結果、元々やると聞いていたことができなくなったり、彼らの状態が大きく変わってしまっていることがある。

また、私たちの特徴として、クラスごとにプログラムを届けることが多くて、教室ごとの差をすごく感じるのです。どういう差かというと、教員の姿勢であったり、情報の届け方によって探究的な学びはすごく差を生んでいます。例えば姿勢は、この時間は価値があるという先生は、私たちが行く前に、こういう価値があるから積極的に話を聞きなさい、質問しなさいと言ってくださって、生徒たちも頑張ろうと思って来ます。中には、よく分からないけど、取りあえずやってみればという先生もまだいらっしゃるなと感じます。そういう先生方のクラスに行くと、誰も聞く気がないところから始まる。先生が意味ないと言われたものに対して、生徒たちも受け取る気持ちは薄いですね。

そういった姿勢でも差が出ますし、情報もそうです。ここは意識が低い高いでなく、先生方の御経験であったり、つながりの中で、ある先生はどんどんこういう場があるから言ってくるなさい、毎週のように外部の場を紹介するところもあれば、先生としては、そういうのはいい、取りあえず受験勉強だからこういうのは行くなよ、勉強ができていないやつは行くなと言う先生も中にはいます。そういう情報の届け方でも差を生んでいると思っています。重なりましたけれども、情報というの、私たちから届けさせていただくことも多いのですけれども、先生の判断で届けられないことが大きく発生することがあります。

今度は私たちの課題認識ですけれども、学校へ単発で1回1時間、2時間入っていただくだけでは一人一人の子と向き合い切れないというのは、どんなに工夫してもあると思っています。特にそれを課題だと感じるのは、どんな学校を通して2割ぐらいは、すごく意識がある、もっとこういうことをやってみたいんだと熱い思いを語ってくれる子はいます。そういった子たちは、先生からすれば問題児だけれども、やる気あるロールモデルです。だからこそ優先順位としては下がらざるを得ないと思っています。生徒の自主性に任せるのですが、そんな生徒であっても、自分で情報を探してきて一歩踏み出せるかという、そこまでは難しいというのを感じています。そういう子たちに本当はもう少しサポートができればすごく可能性が開くのに、できないというの、はすごくもどかしさを感じる瞬間です。

次も重なりますが、時間の制約、一斉授業の形も同じように制約になっていると感じます。

最後も私たちの力不足だと思っているのですが、そこで火が付いた2割の生徒に対しても、こういう機会があるから行ってみればというのがなかなか言いにくいというのは私たちの側の課題としてもあります。それは、学校外の機会、例えば、サポートしてくれる人がいるよ、この人に聞いてくればというところがいつもあるわけではない。夏休みに行くと留学のプログラムがあったり、いろいろなプログラムがあったりするのですが、4月に高校生に会ったときに、夏にはこんなイベントがあるけれども、それまでは分からないとなってしまう。あとは、本当にマイナーと言うと言い方はあれですけども、あまり多くの人と関わっていないことを感じていて、ここをもっと探究したいんだと言われても、それに対する知識が私たちとしてもなくて届けられない。そういうところに課題を感じる瞬間があります。

何が原因なのか。いろいろな原因があるのですが、あえて三つ大きな原因としてあるのではないかというのを書かせていただきました。

原因①は、学校側から見た際に信頼に足る場や期待がないということです。先ほど学校の先生の姿勢であったり、情報へのリーチの度合いによって変わってくるというお話をしたのですが、それは先生の問題だと言ってしまうまでもありますが、構造的な問題で、先生になる課程でまずそういう要素はないですし、先生方もお忙しい中でなかなか自分で情報を取ってこいというのは難しい。その前提をもちろん変えていく必要もあるとは思っているのですが、そこをいきなり変えるよりは、今できるところという意味で言うと、どんな先生であっても、これを出せば生徒に安心して伝えられる。取りあえずここを見ればそれがある。先生からしたときに簡単にアプローチできるものがまとまっていないことが原因ではないかと思っております。それが信頼に足るという表現ですね。チラシなどたくさん届けていますけれども、これが安心していいのかできないのか。電話して確認いただくのもあるのですが、それを一々やっていたら先生方も大変だと思います。それをある程度保障できるものが今ないということの問題意識として持っています。

原因②として、外部からサポートを行うとハードルがすごく高いと感じています。社会教育側に今機会が十分ではないという話をしましたが、誰もやりたい人がいないのかというと、そうではなくて、こんなことをしたいのだ、私はこんな専門性を持っていてやりたいというお話は、私も相談を受けますし、たくさんいるなと感じております。なぜそれが

高校生に届いていないのか。もしくは場として顕在化しないのかということ、一つは集客が難しい。こんなことをやりたいという思いを持ったとしても、自分で先生方に電話していくかということ、最初の①番や構造的な話になりますけれども、先生が忙しくてそもそもつかまらなかったり、先生も一々電話が来たら勘弁してくれとなりますよね。そういうところもあるのではないかと考えています。

また、会場の確保。例えば1人に対してもやるよという思いはあったとしても、1人のために1,000円、2,000円の会場費を払って用意するのか。参加費を3,000円取るのか。そこは、高校生としましても、できなくはないと思うのですが、やりにくいのはあると思っています。それによって、やりたい人も届けられないし、本当はそれを求めている高校生がいるのにその高校生もそこにリーチできない。そんな機会損失が多数発生しているように感じています。

また、そういったものによって、そもそもやりたいと思ったプログラム、こんなことをやったら面白いのではないかという場も、実験という言い方が正しいか分かりませんが、それを練習する機会がそもそもないです。こんなことをやりたいと思って立ち上がるNPO・団体はたくさんあるように感じています。私が起業してからも、いろいろなNPOや学生団体が立ち上がっては消えているのをよく見えています。そういう意思ある個人・団体の業界離脱はすごくもったいないと思っています。

原因③としましては、私たちも含めてですけれども、対象層やターゲットによって団体間のつながり、情報共有が弱い。それがもったいなさを生んでいると思っています。東京都内には本当にたくさんのプレーヤーがいると感じます。それは、すごい可能性のはずですが、それをお互い認知していないことがたくさんある。例えばターゲットアプローチによって、貧困であったり、何かのテーマに対してのシンポジウムはたくさんあって、そこに対しての横のつながりはあるのかもしれないですが、そこを超えたつながりはないのかなと思います。アントレプレナーシップというテーマだったらつながっていたり、体験学習というテーマでつながっていたり、一つずつのテーマカテゴリーではつながる場があるのかもしれないですが、体験学習のところに起業したいという子が現れても、起業のサポートをしてくれるところを知らなかったりして、せっかく外へ出てきたのに次の一歩が示されずに終わるのがすごくもったいないと私は思っています。お互いが知っていれば、お互いパスし合うという表現が正しいか分かりませんが、高校生にうまく道を示していくことができるのではないかと。それができていないのが一つの原因になっているの

ではないかと思っています。

学校教育側、社会教育側の壁を少しずつ取り除いてサポートしていけたらいいなと思っています。

私たちの挑戦したいこと。本当にここは軽くお話ししたいのですが、そういった状態を捉えて、まず私たちとして、一団体としてできることという意味で言いますと、いかに学校と社会の教育をつなげていくのか。特に一人の個人としての視点となったときにそれができるようにしていくのか。そこに力を入れていきたいと考えております。

1番目として、コロナ禍で生まれたオンラインをうまく活用して、もっと自分はどうしたいんだと思った個人に関しては、うまく私たちにアプローチしてもらえれば人や情報の紹介ができる。本当に小規模ではあるのですが、私たちが関われる範囲でできたらいいなと思って、今プロトタイプを掲げているところです。

2番目としては、ユニバーサルアプローチでいろいろなニーズを持った高校生たちが出てきたときに、そこに対応し得るだけの「創り手」をつくっていく。そこをサポートしていくことにも力を入れていきたい。これまでもいろいろな研修会であったり、教育NPOに対する勉強会はしているのですが、それを更に実践型で、高校生に対しても試せるような仕組みができれば良いと思っています。

最後になりますが、現場から東京都に望むものということで、こんなものを東京都としてできたら面白いのではないかと説明させていただきます。

1つ目は、原因にも書いたところにつながりますが、教員、学校が安心して、信頼して紹介できる外部資源の集約化、可視化、また、それを接続するための仕組みが必要かなと思っています。具体的な例えばのイメージですが、都立高校生の社会的・職業的自立支援教育プログラムは素晴らしいと私は思っています。何が素晴らしいかというと、いろいろなNPO、企業が世の中にある中で、ここは安心して使っていていい、お金に関しても気にせず学校としては教育のためだけを考えると使える。そこが素晴らしいと思っています。これを学校の外に置き換えてみたときに、こういう生涯学習がありますよ、こういう青少年教育のものがありますよということを、先生が何も考えなくても、時間を使わなくても、これを見てみてと生徒に渡せるだけでも出てくる高校生は多いのではないかと考えています。その仕組みができるだけでも大きく違う。例えば自立支援教育プログラムの運営のときには必ずこのチラシを配ってくださいという仕組みがあったり、そういったプログラムの人たちに対して、社会教育側、青少年教育にはこんな事例がありますとい

うことを学べるような場をつくったり、横の団体の情報が伝わっていったり、学校の中に入る人たちが学校の外のことをよく知っている。そういった状態をつくれたら良いのではないかと考えたりします。

二つ目は場についてです。何度もこういう場があったら良いということの原因の中でもお話ししましたがけれども、特に定常的に存在するポイント。あとは、ターゲットアプローチでなく、誰でも取りあえずここに行けば次の自分の学びをもっと深められるかもしれない。先生からしても、ここに取りあえず送っておけば安心。そんなリアルな場所があると良いと思っています。そこにはどんなものがあってほしいかといいますと、様々な団体や機会、ネットワークのハブとなれる団体がそこにはいて、高校生に対して、ここへ行ってみれば、この団体を今度見てみればといろいろなことが紹介できる。もしくは、場として毎日のようにいろいろな説明会が行われていたり、いろいろな団体のイベントが行われている。定期的に使われている場がつかれると、一旦行ってみれば、来月、正に私はこれに興味があるからそこに行ってみようか、そんなこともできるのではないかと考えています。

ポイントとしては、教員としても生徒としても安心して行ける。つまり、東京都がやるからこそ安心して行けるというのが本当に強いのではないかと考えています。どんなに名立たる企業であっても、大きな企業のオフィスにいきなり行けるかという緊張しますよね。そうではなくて、自分の地元の公民館に行くぐらいの気持ちで取りあえず行ってみる。先生としても安心できる。そんな場所が、都がつくる場の価値だと思っています。

また、私の言葉で言うと「創り手」という様々な団体たちが、先ほどの会場費がかかったり、あまり人が集まらないところは金だと言いましたけれども、そこが担保できる場になるといろいろな人たちがサポートに入ってこれると思います。その経験を踏まえてどんどん成長して、もしかしたら団体・NPOか、自分で自立していくような場になっていくかもしれません。次にもつながりますが、お金、人件費よりも、もしかすると場があることのほうがよほどその団体の自立につながったり発展につながるのかなと私としては考えています。

つながりましたら、「創り手」を応援できる場所ですね。いろいろな団体、いろいろな専門性を持った人たちがいかに高校生をサポートできる状況に入っていけるのか。そこが非常に大事になってくると思っています。そういった方たちへの支援として、上記の場であったり、研修であったり、もちろんそこには助成金であったり、資金の援助があれば

いいですけども、そういった支援の仕組みができるの良いと思っています。

最後になりますが、高校生自身も「創り手」になるというのが私としては実は一番思いとして強いところでもあります。私自身、高校生のときに自分で高校生のための場をつくっていました。そのときの高校生だからこそ分かる悩みや課題観というのは、やはり当事者が一番持っていると思います。そんな彼らが、自分らが「創り手」となって場をつくっていく。そのために高校生に聞くのも場です。学校だと教室を使わせてくれない、公民館はお金がない、そういう悩みを聞きます。そういった意味での場があると良いと思いますし、高校生のつくった機会の情報がいろいろな高校に届く仕組みがあると、本当に彼らが生の思いで、こんな学びが作りたいたいというものをつくれるような環境が東京都にできていくのではないかと考えております。

少し長くなってしまいましたが、以上が私たちの活動のお話と望むもののお話になりました。ありがとうございました。

【笹井会長】 どうもありがとうございました。非常に多岐にわたる御報告を頂きました。

これから議論していきたいのですが、まずは、事実関係や、もう少しここを詳しく聞きたいというような御質問はございますでしょうか。

【主任社会教育主事】 事務局から最初に、質問と、なぜ今回ウィルドアさんに報告をお願いしたのかという理由の説明をしたいと思います。

前回の夢職人の岩切さんは主に小中学生の世代のユニバーサルアプローチを主眼に置いた団体だったのですが、今回ウィルドアにお願いしたのは、高校生世代を対象としたユニバーサルアプローチの可能性とその意義を委員の皆様方と共有したいと思って報告をお願いしたということです。それが私からの補足です。

1点、掘り下げて説明をしていただきたいのは、14枚目のスライド、社会教育のところ「非日常性な関係性」という言葉が使われています。これは、実は第10期東京都生涯学習審議会の「中間のまとめ」をつくっているときに、私もあえてこの非日常性という言葉を使いたいと思って持ち込んだことがあるのですが、竹田さん自身は、非日常というものが高校生世代にとってどんな意味を持つのか。結構そこが高校生に社会教育の場を提供する意味の重要な要素なのかなと思うので、その辺を含めて少しコメントを頂きますでしょうか。

【竹田代表理事】 ありがとうございます。

まず、私たちがなぜここで「非日常」という言葉を使ったのかという話ですけれども、学校教育の対比が分かりやすいかなと思うのですが、学校の中のコミュニティというのは、よく言えば、いつもの関係性の中で、問われることなく、みんな分かっている中で話もできます。自分のキャラクターが分かった中で話ができますし、コミュニケーションできる。でも、その分、一方で、先ほどもお示しましたが、キャラクターが固定化して、なかなかその学校で求められない自分を出せない。非日常的な環境というのは、ある種、全てリセットされるので、自分が本当はこう見てほしいという自分をそこで演じることがある。そういう自分を出せたり、日常だとやりにくいことができるという意味で「非日常」という言葉を使っているのが一つあります。

もう一つだけ。だからこそ、非日常では、学校では改めて問われることのない、あなたの自分のことを聞かれることが起きやすいと思っています。その中で、改めて、学校側の自分、何とか高等学校の自分ではなく、一人の人間としてどうしてこうなっているのか、どう思っているのかが出しやすくなる。それが非日常という場の価値だと思っています。

【主任社会教育主事】 正にそういうことだと私も共感するのですけれども、竹田さんのお話の背景の中には、潜在的に自分の中で、これをしたい、あれをしたいという欲求が一人一人の中にあって、それを発出させやすい条件や場をつくれるのが非日常だというふうに解釈してもいいですかね。

【竹田代表理事】 はい、おっしゃるとおりだと思います。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。

【酒井副会長】 上智大学の酒井と申します。今日はありがとうございました。

私は、学校教育と社会教育の連携というところにすごく関心を持っていて、今日お話を伺って、実際にそういうことをされている方のお話ですごく興味深かったのですけれども、少し確認ということで、スライド27枚目、「学校教育と社会教育をスムーズにつなぐ仕掛け作り」というシートです。マイプロジェクト関東事務局と長野県教育委員会の学びの改革支援課との共催、こういうつながりがきちんとできるところがすごく大事だと思うのです。どのようにして学びの改革支援課と共催に至ったのか。その中でどういう活動を具体的にされたのかというところをもう少しお聞かせ願えませんか。

【竹田代表理事】 御質問、ありがとうございます。

長野県教育委員会の中で、総合的な探究の時間に切り替わる学校教育改革という世の中の学校教育の大きな流れがある中で、率先して長野県の高등학교の学びを探究的な学びに、

そして、ただ探究的でなく、自分の興味あることをテーマにした探究であったり、自分と社会の不可分な問いから始まる。正に総合的な探究の時間、そこをしっかりと推進していきたい。そのような探究を県内に拡げていく中で、マイプロジェクトというのが正に理想の探究の一つの形だと言っておきまして、これを長野県中の高校生たちに届けたい。それができる環境を学校の中につくっていききたい。そんな相談からスタートしたのがこの取組になっています。その後、「社会に開かれた教育課程推進事業」の一環としてこの取組を行わせて頂き今に至ります。

それをするためにどんな取組をしているのか。それはなぜなのかという話ですけれども、まず一番大きなのは発表機会になります。マイプロジェクトアワードと私たちが呼んでいる取組で、これは7～8年もずっとやっているアワードですけれども、その長野県の発表会をつくるというのがスタート地点でした。長野県の中で、つまり、マイプロジェクト、自分のテーマ、自分の興味があるところから始まる探究をやってきた高校生たちの発表の場をいろいろな学校の先生方に見てもらふこと、もしくは、いろいろな学校の生徒に見てもらふことによって、いろいろな学校で理想の探究をしている生徒を増やしていこう。その火種をどんどん増やしていって全体を変えていこう。まず、全体に理想を共有するための場をつくりたいというお話でした。

ただ、それだけでは理想には至らないということで、ある種ロールモデルをつくる意味で、意識が高いといいますか、やる気のある生徒を学校からうまく送り出してもらって、それをこちらでマイプロジェクトの観点から私たちのノウハウを使ってサポートし、うまく自分のことの探究を進めていく。そういう外部でサポートするスタートアップという場と中間発表、それを発表してメンター、いろいろなゲストの方に話を聞いてもらってアドバイスをもらうような場を外部でつくる。その接続によって、いろいろな学校の中でロールモデルが生まれていって、そのロールモデルを見た先生方が、どうしてうちの学校から生まれるのかという議論を長野全体で生み出していく。そういった大きなうねりをつくっていくための外部の場として使っていただいている形になります。

【酒井副会長】 ありがとうございます。すごくプロセスがよく分かったのですけれども、このアワードというのは、幾つかの学校の代表が集まって、そこで発表会のようなことをする形式ですか。

【竹田代表理事】 そのとおりでございます。今年で言うと40のプロジェクトが10校か20校ぐらいですかね。高等学校から集まってきました、それがお互いの事例を発表

していく形になっています。

【酒井副会長】 それでお互いに見合っ、あそこであんなに面白いことをやっているからというので 自分たちもやる気が出る、そういう仕掛けなわけですね。

【竹田代表理事】 はい、おっしゃるとおりでございます。

【酒井副会長】 ありがとうございます。大変よく分かりました。

【林委員】 明治大学の林です。御報告、どうもありがとうございました。基本的なところで2点あります。

一つ目が資料の中で、「これまでの主な取組（学校内）」というところの一つ目の黒丸で、幾つか学校の名前があつて、どんな学校なのだろうと思って確認したのです。都立高等学校は全部普通科の学校ですね。三浦学苑高等学校が一部工業系の学科がある学校だと分かったのですけれども、今回御報告していただいた実践の取組内容というのは、普通科に通っている高校生の実践というふうに理解する形でよろしいでしょうか。

二つ目です。報告の中で探究学習やキャリア教育という文言が使われていたと思うのですが、実際、高校の教育課程の中のどの活動とつながっているのか。高等学校だと教科、総合的な探究の時間、特別活動と三つありますね。それから、教育課程外の活動もあります。お話の中で、総合的な探究の時間とつながっているのかなと思いつつ、個別の事例を紹介していただいたときに土曜日の授業とありまして、教育課程外の活動も何か絡んでいるのかなと思ったので、学校教育の教育課程内外、どの時間を活用しているのか教えていただくと参考になりますので、お願いします。

【竹田代表理事】 御質問、ありがとうございます。

まず一つ目の普通科だけなのかという御質問ですけれども、このページ（15ページ）の「高校への探究・キャリア教育授業サポートプログラム」に書いている学校については全て普通科になっております。ただ、同じ普通科といっても、例えば就職する人が多いような学校からいわゆる進学校と言われる学校まで広くあります。エンカレッジスクールというカテゴリーのところもあります。

二つ目は、教育課程のどこにつながっているのかという御質問です。今このページのキャリア教育授業サポートプログラムに関しては、基本的には総合的な学習の時間というカリキュラムの中になっています。これからは総合的な探究の時間、一部の学校ではもう名前も変わっていますが、総合的な探究の時間の中で行わせていただくプログラムという形になっております。

「探究」という言葉を使うときという話になりますが、総合的な探究の時間の中で探究的な取組がいろいろな学校で行われ始めていると思うのですけれども、学校の中では家庭科の時間を使って探究的な学びを家庭科としてやる。そこに対して私たちがある意味で間接的、つまり、マイプロジェクトアワードなど外部の場ではありますけれども、サポートすることもございます。また、さっきの普通科の話ですが、マイプロジェクトアワードという先ほどの発表会には工業科の生徒も来ますし、農業科の生徒も来ますし、国際科、あとは探究科などもありますけれども、いろいろな科の高校生に参加いただいております。そういった意味で私たちが探究と捉えるときには、総合的な探究の時間が中心ではありませんが、時には国語の授業で横須賀などは行われていますが、いろいろな授業で行われているもののサポートになっておりますし、普通科に閉じたものではないというふうに捉えています。

【林委員】 分かりました。ありがとうございます。

【笹井会長】 それでは、時間の関係もありますので、先ほどの御報告を踏まえて議論したいと思います。

私からまず初めにお聞きしたいのです。キャリアのプログラムをつくっていくときに、例えば、文部科学省のキャリアに関しての言い方というのは、キャリア教育からキャリア学習になったり、その前は進路指導などと言っていたのですが、学習者の主体性やボランティアリズム、やる気、モチベーションなど、そこを重視するところになってきたのだと思います。でも、キャリアというのは、それだけではなくて、自分ができること・できないことという次元の話があるのではないかと思うのです。つまり、我々も、初めからこういうことをやりたいと思ってその仕事に就いている人はあまりいないですね。初めは異なる職業についていたとしても、途中から別の仕事のほうが面白くなって、今に至るといふ人が多いのではないか。つまり、ウィルの意志というレベルの次元でキャリアを考えることと同時に、できる・できないというレベルで考えることもとても大事だと思うのですけれども、その点についてはどういうふうにお考えでしょうか。

【竹田代表理事】 ありがとうございます。

正に御指摘のあったとおり、ウィルドアのウィルは意志ではありますけれども、意志というのはどのように生まれてくるのか。私たちとしてもできないことをやりたいとは思わないですし、できることをやりたいと思うというところがまず一つの軸としてあると思っています。まず、やりたいことを見つける前にできることを増やせという言葉もあると思

いますけれども、そのとおりで、意志を磨くと、一方で、自分自身がいろいろな経験を積んで、自分はこれができる、これが得意だ、これは逆に苦手だ。そういったものをまず理解することによって、やりたいことを見つけていく。そういうことを応援したいという思いもあります。

かつ、少し時代が変わったのかなと勝手に思っているところとしましては、意志があれば、学ぶ方法は、ある種、誰でも身につけることができる。デザイナーになりたいと思ったら、昔であれば美術大学に行かなければできなかったのかもしれないですけども、今はオンラインサービスであったり、いろいろな学ぶコンテンツはある。その意志がスタートになって、実は自分自身で学びを獲得していけばできるようになっていくかもしれない。そういった意味で、まず根っこにあるのはウィル。そして、そこからできることを開発して行って、できなければ、自分としては違うんだな、向いてないんだなというところで違う意志を見つけていく。そういった在り方が推進できると良いなと思っています。

【笹井会長】 大変明快な御回答を頂いて、ありがとうございました。

【広石委員】 どうもありがとうございました。私は都立日野台高等学校も関わっていてウィルドアさんの話をよく聞いているので、今日はお会いできるのをすごく楽しみにしていました。充実した発表をありがとうございます。

三つほど伺いたいことがあります。

一つは、先ほどの話で、探究の学習などを進めていくときに、受け入れ側の社会教育のメニューがないのではないかとおっしゃっていましたが、私はその問題意識は同じです。先程の都立日野台高等学校だと割と日野市の方なども熱心に、地域側で受け入れようとしてくださっているのが現在行っている学習プログラムができる。もちろん先生の働きかけなどは当然あるのですけれども、地域側もそれ以上に受け入れてくれる。そういったときに、いわゆる社会教育、公民館などでなくても、例えば商店街がどう受け入れるのかということがあると思います。今まで竹田さんが活動されていて、地域の大人側がどういうふうに参加していけばいいか。理解者や賛同者を増やすときに何が大切とお考えなのかということもまず一つお聞きしたいと思っていました。

二つ目は、高校生がつくる側に回るのが大事だとおっしゃっていることです。私もそこは非常に共感をしています。中・高生が、むしろサービスをつくる側になり、当事者性のあるものをつくっていけばいいなと思っています。そういう中で、さっきの話の逆を言うと、高校生が、マイプロジェクトをやって、それがアクションへと繋がるのだけれども、

本当の意味で「創り手」側に回っていくのはすごく難しいところもまだまだあると思っています。もちろん全員が全員そんなに完璧につくらなくてもいいのですが、つくれる側の高校生というか増やしていく仕掛け、プログラムなどがもっと要るのではないか。例えば MAKERS UNIVERSITY U18 みたいなものを展開すればいいのか。高校生側がむしろ学びの場をつくってしまうことに対して何が大事なのかというのが二つ目です。

三つ目は、学校との連携によって幅広い層にリーチできるというのは、発見というか、そういうふうによく組まれているのだなと勉強になりました。学校には、例えば不登校の子や学校教育になじめない子、中学校から高等学校に進学できない子や中退してしまう子も結構多いと思うのですが、取り残されてしまったような子に対して、今はどういうことをされているか。今後、都としてそういう層に対してウィルドアさんのプログラムなどをどう届ければいいのかなどについてお考えをお伺いしたいと思います。

【竹田代表理事】 御質問、ありがとうございます。私も広石さんのお名前をいつも拝見していて、お会いできるのを楽しみにしておりました。オンライン越しではございますが。

都立日野台高等学校を御存じない方もいると思いますので、簡単にどういう関わりをしているのかと申しますと、都立日野台高等学校にはとても意欲ある先生がいらっしゃいまして、その先生が日野市を巻き込んだ探究的なプログラムを2年前ぐらいからつくっていらっしゃって、広石さんも多分そこで講演されたり、高校生の探究にインプットされています。私は大体その後と呼ばれて、広石さんの話を踏まえて、じゃ、どうしていきますかということを考えようとワークショップでやる。そういった形をやらせていただいています。正に二つで連携してやらせていただいている感覚がいつもあるところになっております。日野市と連携して市役所の方々がたくさんサポートされていたり、正に商店街のサポートをされているのだと思っています。御質問は、理解者を増やすにはというお話であったと思うのですけれども、私自身、横須賀市で6年近くこの土壌をどうつくっていくかということに向き合ってきました。まだまだ本当に答えはないのですけれども、私は三つ鍵だと思っていることがあります。

一つは、高校生を子供扱いさせない。高校生はここまでできるんだぞということを見せてあげることだと思いました。多くの場合、高校生はできないよね、こちらからしてあげないといけないねという思い込み、ある種は合っているのですけれども、思い込みが多い。その中で、高校生でもこんなことをやっている子がいるんだと。横須賀市では昔ネイビー

パーカーをつくった女の子がいて、それがANAの飛行機の中のフライトニュースで流れてしまうぐらい有名になった事例があったのです。横須賀市の女子高生が始めた取組で、横須賀にはネイビーバーガーというのがあるのですけれども、それをもじってネイビーパーカーをつくって、それによって横須賀市の魅力を発信しよう。そんなことをやったときに地域の人々の見方が変わったのです。高校生はこんなことができるんだ。高校生をもっと巻き込んでしまおう。そこからすごくいろいろな人たちが高等学校に対して連携を持ちかけたり、高校生が何か言ったときにも期待を持って見てくれるようになりました。期待を持たせるというのが一つ。

二つ目は、大人がもっと慣れることが大事だと思っています。高校生をもっと支援したいと言葉では言うのですけれども、高校生と話すのは20年ぶりかな、うちの子供はもう40歳だよという方が高校生と話すのはすごく抵抗があるのです。そこを慣らしてあげるための場が必要で、私たちはそれをワークショップなどを通じて、雑談を一緒にしてみることです。一緒に雑談をする中で、今の子はこんなことが好きなんだ、こうやって話せばいいのねと慣らせることです。

三つ目は、一つ目と若干かぶってしまうのですが、「創り手」として受け入れるということかなと思っています。最初の段階は、参画のはしごというロジャーさんの話があると思うのですけれども、最初は飾りから始まるのです。ちょっと巻き込んでみようかな。そうではなくて、彼らが主体的な「創り手」だと地域の人たちが認識し始めると、いろいろなプロジェクトの提案が来ても、よし、やっちゃおうぜとなるのです。そのマインドをどうつくるか。少しかぶっているところがありましたけれども、必要かなと思っています。

二つ目の御質問に移りたいと思います。「創り手」に回る高校生を増やすにはというところで、ここも是非ずっとディスカッションしていきたいテーマです。やはり土壌というのはいくらもある。どういう土壌かという、実はさっきの偏見、高校生は学び手であり、「つくり手」ではないという感覚は高校生自身も持っているものだと思います。鍵を握るのは、先輩がやっていることだと私は基本的に思っています。一つの学校のクラスに1人そういう者がいるとそのクラスがどんどん覚醒していくのです。でも、多くの場合その1人がいないのです。1人だけだと浮いてしまって、あいつは変なやつだとなるので、それが1人から2人、3人になっていく必要はあるのですけれども、身近に「創り手」になっている高校生がいる状態をいかにつくれるか。そのためにどういうプログラム

が必要かという、例えば最初の一步を踏み出しやすい枠組みがあるものがもう少し増えると良いと思っています。つまり、いきなり、やる気があって、自分からこんなことをやりたいぜという人ばかりではないです。アーリーアダプターと呼んでいるのですけれども、イノベーター、自分からつくってしまう子ではなくて、本当はつくりたいけれどもつくりえない子たちはいっぱいいると思うのです。それを探究的な学びの時間でやっていくのもそうなのですが、それでも学校の目的に応じてテーマを決められてしまうところもあるので、学校外で、例えばこの地域の活性化のためにできることは何だろう。長野県にはユースリーチという団体があるのですけれども、長野県の未来をよくするための高校生、学生団体があって、そういうのがあることを入学タイミングから知っていると、そのプログラムに参加して、ある種、流れるようにプログラムをつくって行って、大学生になってもその場において次の世代をつくっていく。こういう枠と縦のコミュニティみたいなものがあると増えていくのではないかな。そこを少し狙って私たちも横須賀で活動しているところではあります。

最後に、不登校、中退、取り残された子みたいなところに関して、これもおっしゃるとおり、可能性の卵、可能性の固まりなのに、本当に届けられていないと思う一つの層だと思っております。私の活動として少し提供できるとすれば、横須賀で空き家を借りまして、そこをリノベーションして、月に1回、中・高生から大人までみんなで遊ぶ会をずっとやっていました。そこに実は結構大人の紹介などで不登校の子たちを呼んできてくれることがありました。彼らはすごくゲームが得意で、スマッシュブラザーズというゲームが得意なのですけれども、スマブラをやらせると輝くのです。おまえ、すげえな。そういうので毎月会う場をつくってあげることでどんどん自信をつけさせて、その子は起業体験プログラムに参加させようと思ったのですね。そこで起業と触れてもらったり。そういう受け入れる地域の場と、そこに対して一步踏み出すにはこういう場所があるよという場の提供、それがもっと地域の中で円滑に回っていくと良いというふうに思います。

また、私はこれからオンラインでつくるという話をしましたが、オンラインでも、学校だけで届かないけれども、意欲が実はある子たちに届くものができたら良いなと今は考えております。

【広石委員】 とてもよく分かりました。やはり地域単位で密度を上げることもすごく大事だなと思いました。ありがとうございます。

【青山委員】 文教大学の青山といいます。今日はありがとうございました。

今の広石委員とのお話も踏まえてですけれども、地域や地域資源という言い方が今日もたくさんお話の中に出てくる中で、高校生が会うべき地域資源にはいろいろなレイヤーや種類があるのではないかと思います。例えば学校を通じて出会える地域となると、日野の場合は高等学校の周りの日野の地域と出会っていることになりますよね。ただ、中学までと違って、高校生になると日常圏が地元だけでなく、学校の周りなどに広がっていく中で、密度を濃くしていくべき地域にもいろいろなバリエーションがあると思います。例えば、地域のいわゆる子供会やジュニアリーダーみたいところで救われているような子たちも結構いるでしょうし、学校を通じて出会った個々の現場や商店街で良い出会いをしている子たちもいるかもしれない。あるいは、都や各自自治体が持っているユースセンターのような施設で支えられる場合もあれば、NPOなどのプログラムや事業で出会えるような場合もある。

地域というものの内部の多様性に目を向けたときに、こういったコンテンツが高校生にリーチしやすいかとか、どういう場所が高校生たちにはアクセスしやすいかなど、その辺の多様な地域というのを前提にしたときの組み合わせやパターンの違いが聞けると面白いと思って聞いていたのですけれども、その辺はいかがでしょうか。ざっくりで申し訳ありませんけれども。

【竹田代表理事】 御質問、ありがとうございます。

地域資源という言葉がたくさん使わせていただきましたが、おっしゃるとおり、よく論文などでも地域資源と使われるときには学校外の全てが地域資源だと表現されることが多いと認識しています。おっしゃるとおり、学校周辺の地域、日野市だったら日野エリア、都立日野台高等学校だったら日野だったりするエリアもあれば、いつそのことアメリカももしかしたら地域資源と言うかもしれませんね。世界という地域資源もあるのだと捉えています。私たちとしては、どの地域資源にも、それぞれに求めて、それが合う高校生がいる。高校生を中心としたときにそういうふうには捉えていますので、これが一つ一番大事だというのは特に今の私の頭の中にはないかなと思っています。

それぞれどういう強み・弱みがあるのかというのを簡単に今思いつくところをお話ししますと、私としても、いわゆる通学圏内のエリアという地域、一番最初に大事だと思った地域資源の範囲はそこでした。なぜかというと、やはり彼らは時間も無いし、お金も無いですね。そう思ったときに、彼らが誰でも行ける範囲というのがその地域だと。特に学校の周りというのは、学校が終わった後、例えば地域へ話を聞きに行くとなったときに10

分圏内で歩いて行ける範囲です。その辺の地域が一番取り組みやすく、誰もがアプローチできる範囲だと思っています。学校の周りというのはすごく大事だと思っています。また、学校の授業の中で扱うときにも、それぞれ自分の地元でやっていいよという表現をする学校もあると思うのですが、これは個人的な主観として、学校の探究は最初の一步であることが多いと思いますので、その最初の一步という意味では、いきなり自分で開拓するのは難しいのです。みんなそれぞればらばらの地域で、自分でつながりを開拓してこいというのはなかなか難しい。学校としても、全地域の地域資源のつながりがここにありますがというのは難しい。そういう意味では、学校の周りの地域に一つの場面設定をさせて、日野市だったら日野というエリアの資源をつながりやすくしておく。ここが探究としては一番始めやすい地域だと思っています。

私も、横須賀というところでは横須賀の学校の周りの地域の人たちと一緒に働きかけることをしていますし、場づくりをすることは多くあります。その後については生徒の目的次第ですね。在りたい姿次第だと思っています。世界で活躍したいとなったらアメリカに、それこそインドに行かないと気付けないことはあります。横須賀という地域から出ていかないと自分の理想をかなえられないという人もたくさんいます。そのやりたいことに応じた広さがあるのかなというぐらいのイメージです。

最後に一つだけ私の問題意識を付け加えると、そこがつながっていないことが問題だと思っています。地域の中で困り込んでしまうのです。こういう言い方をすると誰かにすごく角が立つかもしれないですが、例えば横須賀で活躍していると、横須賀から出ていかなくていいのです。それは違う。人によって横須賀から出ていかないと理想はかなえられない人もたくさん世の中にはいる。横須賀で学ぶ範囲で得られること。それ以外にも得られること。それがあつながつながっていない。横須賀だけで活動していると、例えば私の起業家育成のスクールも、多くの場合、横須賀の人は知らないわけです。でも、知っていれば、おまえ、こんなものがあるから行ってこいよと言えるはず。それが多くの地域でできていない。私が今この立場ですごく自分はラッキーだなど思っているのは、いろいろな視点でいろいろなプログラムを知っているので、横須賀であっても世界のプログラムを提供できたり、ほかのものを紹介できる。これを多くの人で紹介できるようになると、もっともっといろいろな人が自分の行きたい地域の範囲で資源を得られるのになと日頃思っています。

御回答からそれたかもしれませんが。

【青山委員】 ありがとうございます。特に都が社会教育の文脈でできることは何だろうと思ったときに、基礎自治体でできることと広域的にできることの違いや、学校レベルでは違う学校の生徒との出会いなど、そういう視点からの地域の広さ、圏域みたいなものに興味があったので、大変参考になりました。

【笹井会長】 青山委員の御指摘のように、自治体に対してどういう支援の可能性を求めるかということもあるのかとは思いますが、そういうことを含めまして、どうぞ御自由に御発言いただきたいと思います。

【山崎委員】 ありがとうございます。今日は、ウィルドアさんの実践のお話を聞かせていただいて、改めて最初に戻るようなことが頭の中に浮かびながらお伺いしていたのです。14ページに学校教育と社会教育の強みと弱みを補い合うような事業の設計などがあるのですが、5年間、竹田さんが活動なさってきて、学校などでプログラムを実施したりなどで、様々御苦労はあったと思うのですが、今の高校生、現代の子にとって、社会教育をやることの必要性、意義というのですかね、改めてその辺のことをどうお考えになっているのかお伺いしたい。最初に戻ったような話で申し訳ないのですが、そこを端的に聞かせていただくとありがたいです。よろしく願いいたします。

【竹田代表理事】 御質問、ありがとうございます。この辺、熱くなると長くなりますので、端的にいくのですが、一言で言ってしまえば、一人一人、こうなりたい、こう在りたいというのは違うのだと思っています。それは一つの学校の中でも違うのだと思っています。そういった人たちが自分の可能性をより開くためには、その一人一人の違う道につながる出会いであったり、機会がすごくその子の可能性を開くものだと思います。それは私の経験からという話も正に御指摘のとおりですし、そこが強くあると思っています。

【山崎委員】 そうすると、そういうものが今の学校教育ではあまりないというか、そういうようなお考えなのですか。

【竹田代表理事】 そういうわけではないと私は思っています。学校の中だけで大きく成長していく人もたくさんいます。部活動を本気でやっていて、地域なんて全く出ないよという高校生を否定する気はさらさらなくて、その学校は素晴らしいと思いますし、そこで輝ける子もいる。ただ一方で、外の機会があればもっと可能性を伸ばせるのになという子はいつの時代もいると思っています。特に時代背景——私の中の時代背景認識ですが、本当に今、中・高生の知っている知識の幅は広いと思っています。ユーチューブを見て育

つ世代ですよ。どういうことかという、私などは大学生にならなければ絶対知り得なかったことを小学生、中学生から当たり前のよう知っています。そう思うと、一人一人のなりたい姿はもっともっと今まで以上に本当に多様になってくると思うのです。それというのは、もう学校だけという次元でもなく、一つの場所だけで届けられる学びの量は限られていますので、そこだけで届けることには限界があるだろうと。全ての人が私は社会教育をやるべきだという論ではなく、もっと社会教育に触れることによって可能性を伸ばす人が、少なくともやる気がある人たちも2割は絶対学校にいますし、もっともっているだろう。そういう前提の下、社会教育が今の時代に必要だというふうに捉えています。

【山崎委員】 言い換えると、そういうものが社会教育だというふうにお考えということですか。

【竹田代表理事】 一人一人の正にニーズに合った、その道に進むための教育だと思っています。

【山崎委員】 ありがとうございます。

【野口委員】 LITALICOの野口です。今日は、御発表いただきまして、ありがとうございました。改めて、私自身も高校生のときを思い返して、自分自身、何が良かったかなと思い起こすと、多様な生き方をしている大人に出会えた、それを知れたということだったり、自分自身で何かしら課題解決に向かって働きかけたりという機会があったことがとても良かったなというふうに思って、改めてウィルドアさんがやっている取組をお聞きして、そういったことがキャリア教育には大事だと思いました。

全ての子供たち、なるべく多くの子供たち、必要とする子供がこういったプログラムにアクセスできることが大事だと思うのですが、そうなったときに二つ質問があります。

一つは、結構、学校によってばらつきがあるというか、こういったことを積極的に取り入れていきたい学校とそうでない学校があると思うのですが、その特徴みたいなものがあるのかどうか。こういう学校はすごく取り入れやすいけれども、こういう学校は比較的取り入れづらい層みたいなのが御経験の中であったら、それを是非教えていただきたい。

あとは、先ほど課題のところ、先生が事前にどういった声かけをするかによっても子供の取組具合が相当異なることをおっしゃっていたのですけれども、そこに対して先生側に何かしらインプットが事前にあるのか。こういったプロトコルをたどって子供に紹介してくださいみたいなものがあるのか、もしくは今後考えられていることがあったら教えていただけたらと思います。お願いします。

【竹田代表理事】 御質問、ありがとうございます。

まず、学校によって差があるのかというところですが、かなり主観も伴うところかと思っておりますので、少し言葉を選びながらお話ししたいと思います。

まず、構造的に一番簡単だと思っているのは私学が取り組みやすいと思っています。つまり、入学者をどうしても集めなければいけない学校はものすごくそこに力を入れやすいと思っています。もう御存じだとは思いますが、そういう学校ほど先に力を入れて改革していったら、それでうまく行って今有名になっているケースが多いのではないかと思います。そういう危機感を持った私立高等学校は変えやすい。そういうところも多い傾向はあります。

逆に、変わりにくいのは公立高等学校だと思っています。一人の先生としては入学者数はそんなに気にしていませんし、卒業生はもちろん良い大学に行かせたいけど、探究と課外活動というのは必ずしも関わってこないと思われる先生も多い。また、進学校ほど、今のままでいいです。探究的なのも、何か楽しいのをやっているからこれでいいんです。なぜいいのですかと言われても、それで良い進学結果が出るし生徒も楽しそうにしているのです。それでもう思考停止になる学校は多いですね。そういうところは私たちとしてどんなに働きかけても聞く耳を持ってもらえないもどかしさを感じる人が多いですね。学校名は出しませんが、そういうことを感じます。だから、構造的にそこはあるなと思っています。

続いて、イノベーターの先生がいるかいないかだといつも思っていて、正に野口委員のような方であったり、私の体験を語って、そうだとしてくれる先生がいる学校は門戸を開くことがあります。公立高等学校であっても、こういう学びは絶対必要だという思いを持つ先生が1人いる学校は外部の者を引き寄せて、それを見た先生方が変わっていったら、そういうストーリーはあるかと思えます。逆説的に言うと、それが誰一人もない学校はどうしようもなかったり、それは権力バランスの問題で、実は若手でそう思っていると言い出せないというのも一方であるとは思っています。取りあえず共感者が一人も見つけれない学校は、私たちとしてアプローチがどうしてもし切れないと思ってしまうところがあります。

続いて、先生の話ですけれども、私たちとしてもそこは悩みながら明確な解決策が見つからない。特に起こるのが、担当の先生はすごく意欲がある。担当の先生から全体に良いアナウンスを頂ける。でもその先にいる担任の先生が結局理解いただけず、当日のプ

ログラム時に非協力的な扱いを受けたり。それは学校内政治の世界ですよ。担当の先生とその先生と仲が悪くて、そもそも担当の先生が言うだけでも聞く耳を持ってくれない。お分かりになる方も多いと思うのですが、そういう政治が学校の中にどうしてもあるなと肌で感じます。その先生にこちらでこういうインプットでご理解いただくといってもなかなか難しいので、今できている範囲としては、事前にワークシートを送っておいて生徒に少し思考をし、その場に異議を感じやすくするなど。少しだけマインドセット、私どものプログラムに生徒がのりやすいよう流れを少しだけつくらせていただく。特に年に数回やっているところは、行く前に宿題を出させていただくことがあります。それをやっておけば少し頭が回った状態で始められますので、少しやりやすくなる。先生への介入というよりは、もう生徒を信じて、生徒を仲間にするにはどうすればいいかということを考えていることに今頭を変えています。生徒は仲間だといつもメンバーには共有しながらやっています。

【野口委員】 ありがとうございます。とても参考になりました。

【永島委員】 私はまさに同じ分野の仕事をしているので、こういう若くて頼もしい方がいるのはすばらしいなと思っていました。学校教育と社会教育で、私はどちらもつなげたいと思ってこの仕事をしているので、一緒に同志がいるのだなということが改めてすごくうれしかったです。

私も課題観としては同じで、私たちの同志をつくっていくにはどうしたらいいのだろうというところがすごくあって、提言というか、課題の中にもあって、そういう人たちをどうやってつなげて広げていったらいいか。そういう役割を、例えば東京都などでそういう方々をつなげて学びの場を広げていくみたいなのがあったら良いなと私自身もすごく思っているのです。それぞれ専門性がある人たちはいるのですけれども、横につながっていない。NPO同士や社団同士がつながっていないことで、同じようなことをやっているのですけれども、それぞれがそれぞれに悩みを抱えていたり、運営などもそうです。マネタイズの話などもそうですけれども、そこに対して竹田さん御自身はどんなふうにお考えかというのを聞きたいと思いました。

【竹田代表理事】 ありがとうございます。いつも学ばせていただいている業界の先輩の前で話すのは本当に緊張しますが、わたしの考えをお話させていただければと思います。

御質問にあった、一つ目の学びの場みたいなものは私も本当に必要だなと思っています。同志をどう増やすかという意味での学びの場ですね。先ほど話されたところで、私として

も、例えば先生方の中には思いを持っている先生がたくさんいる。その先生方が外部とつながれていないのが今まだあると思いますので、そうした先生の中にいる同志をどう見つけるのかというのいつもアンテナを張っています。それは、もしかしたら東京都の力でぐいっと引っ張っていただくような場がつけられると面白いのではないかというアイデアもあります。また永島委員ともきちんとお話するのは今回が初めてかもしれませんが、こういう同じ業界でも横につながれるような機会をもっともつつくるべきだと思っております。

特にマネタイズや、次のやりたいことではあるのですが、次の世代の団体が私たちの失敗であったり悩みを踏まえて成長できるように、私はまだペーパーではありますが、先輩方から私どもも学んでここにいますので、しっかりとこの学びを次の世代につないでいく。そういった学びの場、縦や横のつながりも同時に必要だと感じています。

【永島委員】 ありがとうございます。一緒に頑張っていければと思います。

【土屋委員】 竹田さん、ありがとうございます。私の専門はスクールソーシャルワークで、日本社会事業大学に所属しています。都の事業である、都立高校生「自立支援チーム」派遣事業に立ち上げから関与しています。その事業で、支援者であるユースソーシャルワーカーの皆さんへの助言や研修を行っているのですが、今日の発表は、それらにとって参考になる点がたくさんありました。

感想めいてしまうのですが、まず、お話を聞いていて思ったのが、竹田さんの手法が、ナラティブアプローチ的な考え方やコミュニティワークの在り方に近いな、ということ。私の専門に非常に近い部分がありました。

先ほど地域という話が出ていたのですが、私の大学が立地している清瀬市では、都立清瀬高等学校の高校生たちが地域に出てきてくれています。本学を含めて大学が幾つかあるものですから、大学生も絡みながら小・中学校の子供たちとつながって、地域の学習に関与しています。清瀬市の教育委員会が清瀬を誇れる子供を育てるというようなマスタープランを出しているのです。そこに高校生や大学生も入りながら小・中学生とつながる。そういう土壤があったりするのですね。

先ほども竹田さんがおっしゃっていましたが、プログラム提供が単発的になってしまいがちという課題を克服するために、いろいろなことをやっていращやるなど思ったのですが、地域でのコミュニティワーク的とも言える取り組みを行う上で、どのようなことを意識されているのかお聞きできたらと思いました。

【竹田代表理事】 ありがとうございます。おっしゃるとおり、ナラティブアプローチ、コミュニティワーク、そういうところは正にいろいろな場で学ばせていただきながらいろいろ考えているところですので、是非今後も学ばせていただきたいと改めて思いました。

コミュニティワークという観点でいうと、横須賀市で私たちが活動しているときには、いかに中学校を巻き込むかが大事だと思い始めました。なぜかという、地域の親たちがそういう活動に理解を示さないというのが次の課題としてありました。つまり、どんなに高等学校が頑張っても、すごくいろいろな活動をしている高等学校が魅力的にならないのです。入学者数が増えなかったり、その取組に対しても地域の大人が協力しない。その原因は、義務教育課程のほうが地域とつながりを持ちやすい現状があつて、その方々が高等学校の取組を知らないというのはすごくもったいない状況だと思っていますので、意識的に中学校で行っている探究のサポートに高校生が入るみたいな仕方はできないか。そういう義務教育課程との連携ができるとこれからパワフルになっていくだろうと考えております。

東京都の高等学校と関わる時にも、都立日野台高等学校などは分かりやすいですけれども、日野市が後ろに関わっているからできるというのはたくさんあります。だからこそ、ほかの学校の探究をされる時にも、まだできていないのですけれども、私たちとしては、例えばそこに積極的に市の担当者に見に来てもらう。発表会をつくることを学校の中でやっているのですけれども、その発表会へ地域の義務教育に関わるNPOの方やいろいろな方に来ていただいて、高校生を見ていただく。そういう場をつくっていく。そこで横のつながりをつくっていくことをできないかなとは考えています。

【統括指導主事】 生涯学習課の高島と申します。こちらでは「自立支援チーム」派遣事業を担当しておりますが、高等学校の教員でございますので、その視点でのお話をさせていただきます。

まず、探究的な学びは、本当に生きる力をつけるためには必要な学びなのですが、なかなか進学校では受け入れにくいというお話についてです。実は私が副校長をしていた学校では、中等だったのですけれども、正に自分が何をしたいかを6年間かけて探究していく授業をやっております。その先に学びたいことがある大学を受ける。実はそれが名のある大学だったということで、一貫してそういう指導をしておりますして進路実績を上げてきました。そこは絶対揺るがないところなので、そういう発想になれば、これからの大学の入試改革もそれに合わせていっているはずなので、徐々にですが、きっとこれは日の目を見

るのではないかと考えております。

それから、学校の中の理解というのは、さっきおっしゃっていたように、学校で、もし何人かの先生に興味関心があったとしても、最終的に副校長、校長のところまで止まってしまふことが多いのです。ですので、逆の発想で、やる気のある先生を引き上げる、もしくは先生方に情報を提供するの、管理職に力がありますので、校長先生、副校長先生にアプローチしていくのが良いのかなと思います。先ほど何校か都立高等学校の取組がありましたけれども、そういったものがありますと、副校長はたくさんのチラシや資料を各クラスに配ったり校内に掲示するのですが、安心できそうなものは大きく案内するし、何か分からないぞと思うと隅っこに置かれたりするので、おっしゃるとおり、東京都でやっている、東京都教育委員会でこんなこともやっていますというのがあれば安心して案内できます。一番力があるのは、校長先生同士のコミュニティがいろいろありますので、そういったところで話題にしてもらえることです。実は、探究の時間に関してはとても学校は困っていて、取りあえず教育課程はそういうふう書き換えたけれども、実際にどうしたらいいのだろうというのがありますから、うまくアピールしていくとニーズにぴったりマッチして、本当に生徒一人一人を伸ばしていけるような環境を整えてあげられるのではないかと考えております。

【竹田代表理事】 貴重なお話、ありがとうございました。正に進学校はやりにくいと言いましたけれども、素敵な進学校がたくさんあることは私も知ってまして、おっしゃるとおりだと思います。失礼いたしました。

今の副校長のお話であったり、正に校長のコミュニティがあるという話は、知識としては知っているのですが、アプローチをどうしていいか分からないというのが現場の感覚だなと思いました。今言われてみると、都立の意識が高い校長との出会いは5年間やっていく中で1校もなかったなと思いました。これは、いないというわけではなく、私がアプローチできる場がなかったのだと思うのですね。校長がそこに集まっているよと聞くこともなかったですし、ここへ行ってみればという話もなかったです。逆に、そういう場に社会教育、学校教育でない方々との出会いの場みたいなものができるという学校も導入しやすくなるかもしれませんし、私としても正に今おっしゃっていただいたアプローチをできるのではないかと考えました。

大変ありがとうございます。勉強になりました。

【青山委員】 先ほど地域のことを質問させていただいたのですが、今まで学校

教育、社会教育の間で地域とどうつないでいくかというお話だったと思うのですが、社会教育的には、高校生が地域に出ていったり、つながっていくときに、例えば商店街のおじさんたちだったり、いろいろな地元の団体の人たちの学びにもつなげていくことにも生涯学習的な価値が出てくると思うのです。つまり、高校生を支援する仕組みでありつつも、それを支える地域の生涯学習や地域づくりみたいなものにどうかかわっていくのかというような広がりが見えてくると、より社会教育っぽくなっていくなという感覚があって、その辺のつながりが見えた事例であったり、やっていたらしゃる中でポイントになりそうなことがもしあれば、そちらの視点も含めてお話ししていただけたところがあればお聞きしたいと思いました。

【竹田代表理事】 確かにそれはとても大事な視点だと改めて再認識させられたのですが、事例としては、おっしゃるとおり、まず私たちの団体だけでやっている取組ではないのですが、マイプロジェクトの伴走をする。つまり、彼ら彼女らのプロジェクト、高校生の探究活動をサポートする。そこにすごい学びがまずある。サポートする側にすごい学びがあると私たちは捉えています。例えば、カタリバさんなどはそういうものを研修にされて、社会人、それぞれ企業がお金を出して高校生に伴走する。その社会人が高校生、彼らの姿、発想などを見て学ぶ。そういうところは数多く事例があると思いました。

私たちのところで特にと思うのは、同じですけれども、彼らは何がしたくて、そのために何が必要でという、そのサポートを大人がすることはすごく大人の学びになるということとはよく言われます。ボランティアが300人ぐらい毎年関わってくださっているのです。延べなので合計すると300人で、100人前後の仲間がいつもいるのですけれども、大学生が社会人になってからも彼らと関わってくれたりします。何で関わっているのかと聞くと、やはり自分のことを再認識する場。改めて高校生の声を聞いて、自分はこういう価値観だったなと自分の価値観を再認識する場だったり、彼らに問いかける中で、例えばコーチングの技術だったり、引き出すファシリテーションの力といったものを学びに私どものプログラムに高校生をサポートしに来る。地域のおじちゃん、おばちゃんも正に商店街の方々も、そういう意味で、若手の方に来てもらって、彼らの研修として企業から送り出してもらうことも過去にはありました。自分の話をして自分の価値観を再認識してもらうために、高校生に話してもらう。社会人側も学びになり、高校生側もロールモデルの獲得になる。その掛け合わせをつくっていくことは事例があるかと思います。

本当に大事なところで、正にビジネスにしていく上で、事業として継続させていく上で

もその視点がすごく大事だと最近特に強く意識をしまして、地域の中で大人がお金を出してでもやらせる。それが高校生の学びになる。そこがいかにはまるかということを最近私たちもすごく強く考えているところではあります。

【広石委員】 先ほど信頼できる団体などを、例えば認証みたいな感じなのか、何かリストアップしたらいいのではないかという話をされていましたが、今後、地域と学校を結ぶコーディネーターとして、この団体なら大丈夫だと認めるような際に、竹田さんが基準をつくるとしたら、絶対外してはいけない項目は何だと思いますか。

【竹田代表理事】 難しいなと思っています。すごく考えたことはありまして、そこで私として大事だと思っているのは、まず一つは安全性だと思っています。それはどういう安全性かという、既存だとブラックリストみたいなものが業界の中に実は存在していて、あの団体は危ないぞと。それは女子高生に手を出したのではないか。そういうのは絶対ありますよね。あと、大学生のサポーターにセクハラした。そういうのはうわさで広まっているなど現状については思っています。まず、そういう安心安全な組織運営がなされているのか。その辺をきちんと意識しているのか。どう評価するかは難しいと思っているのですけれども、少なくとも1回そういうことを起こしたらアウトだというぐらいのものはあっていいだろうとは一つ思っております。

あとは、基本的には、ハードルを上げ過ぎるとそれはまた使えなくなってくる。使えるものが減っていつているところがありますので、難しいのですが、活動年数などはないでほしいと思ったりはします。どちらかという、1回目を練習する場所。さっきの場所が正にあって、実績を見ないと言いながらも、実績をきちんと積めるような土台があった上で、例えばそこで安全だったというものが見えればオーケー。最初のハードルをきちんと設定して、誰でも使えるようなハードルを設定してあげてできたらいいと思います。

あとは、効果検証なども、何かの軸で効果検証すると、結局その軸で良い悪いになってしまって、本当はその軸ではないのにとすることはえてしてあると思います。そこはあまりしないほうがいいだろうと。もしくは、何かの軸を設定して、この軸ではこう、この軸は良い。自分たちで何か軸を出してもら。その軸の多様性が大事だなと。すみません。これが大事というよりは、こういう観点が大事だろうぐらいの話ですけれども、そんなことは思ったりします。

【広石委員】 そういった意味では、おっしゃってくださったみたいに、経験を積める場や、まず1回そこで試しにやってみることができる。ある意味でベテランの団体や信頼

できる団体はどうしてもいつも同じ団体になってしまうので、先程、常設の場が必要とおっしゃっていたけれども、そういう経験の浅い団体の試行を支援するというような観点を含めてすごく大事だと思いました。ありがとうございます。

【笹井会長】 理論的な問題から実践的な問題まで、あるいはミクロの問題からマクロの問題まで、非常に多岐にわたる項目について明快にお答えいただきまして、竹田さん、本当にありがとうございました。改めてお礼を申し上げたいと思います。

最後に次第の3の今後の予定に関しまして事務局からお話したいと思っています。

【主任社会教育主事】 竹田さん、ありがとうございました。今日も、現場の人から実践的な課題でいろいろ指摘していただくことによって、審議会の審議の中身も随分深まってくると実感しました。

次回の審議会は、年明けの2月12日（金曜日）午後6時からの開催とさせていただきたいと考えております。次回も今回に引き続いて、「中間のまとめ」をたたき台にしながら現場の意見を頂こうと予定しております。次回は、ターゲット型アプローチに取り組んでいる団体からも意見を聞こうと考えまして、以前、生涯学習審議会の委員でもあった認定NPO法人育て上げネットの工藤啓さんにレポーターをお願いしております。

工藤さんには、老舗の大手NPOとして、多角的な観点からいろいろと我々に対して議論を吹っかけてくれないかをお願いをしておりますので、是非御参加いただけたらと思います。詳細については改めて御案内をさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

【笹井会長】 では、本日の第9回の生涯学習審議会を終わらせていただきます。皆さん、御協力いただきまして、ありがとうございました。

閉会：午後8時04分